

書 評

『がんの今を知る』

—最新情報で学ぶがん医療と保険の新常識—

佐々木 光信 (保険医学総合研究所 取締役兼代表 医師・医学博士) 著



「がん」というと何を思い浮かべるだろうか？ 1981年以来、日本人の死因の第1位であり、4人に1人ががんで亡くなるという致命的な

疾患であるとともに、生涯で2人に1人がかかるというごく当たり前の病気でもあるので、身内や知り合いにもがんで亡くなるという致命的な

募集人必読、最新医療と公的保険取扱いを網羅

多いと思われるが、2021年の生命保険文化センターの調査では、民間がん保険への世帯加入率は66・7%に及んでお

[評者] 白水 知仁 (ミュンヘン再保険メディカル・コンサルタント、元日本保険医学学会会長)

もの、がんの実際をどれだけ理解した上で、がん保障を選択しているのであろうか。また、保険を勧誘する代理店や保険会社の営業職員、そしてファイナンシャルプランナーも、十分ながんの知識に基づいて適切にがん保険の勧誘ができていないのであろうか。インターネットでがんについて検索すれば、情報も数多く含まれている。まさに玉石混交の情報的大海の中に投げ出され、むしろ不安を募らせかねない状態となっている。まずはがんに関する正しい基礎知識を身に付けた上で情報収集しなければならぬのである。そのうえで、がんに関する最新の公的保険における取扱いや自己負担の不安の大海を乗り切るためのまさに絶好の海図、そして羅針盤となる書である。

本書はコンパクトながら取り扱う範囲は幅広く、がんの種類、進行度、予後の違いなどの基礎知識から、標準治療とその位置付け、セカンドオピニオンのあり方やがん治療における医療機能分化、がん患者の就労問題や傷病手当金、分子標的薬などの高額薬剤の出現と薬価算定基準ならびに医療経済学との関連、新薬の保険取扱いに至るまでの、公的保険における取扱いならびに自己負担、がん検診とその効果および課題など、さまざまながんに関する先端医療の紹介、特にゲノム医療については遺伝子パネル検査の結果、どのように抗がん剤が選択されるのかも示されている。また、がん診療の将来については、創薬技術やAIの活用だけでなく、各種がん関連学会が取り上げているさまざまな技術やそれを融合した治療にまで触れている。そして、これらのがんの最新情報を踏まえた上で、民間保険会社での経験も生かして民間がん保険を区分し、どう公的保障で不足する保障を補完するのか、将来に向けてどのような商品が望まれるのかにまで触れている。

がんについて取り扱った著書は世の中にあまた存在するが、がんの基礎から現時点での最新医療、そしてその将来まで幅広く解説するだけでなく、がんに関わる公的医療の状況や民間保険の加入保障にまで触れた書籍を執筆できるのは著者だけであろう。がん治療の現状にとどまらず、将来に向かって、予想されるがん診療の未来像、そして将来に向かって求められる保障までも指し示している。

40年以上にわたりがん医療に接してきた著者自身の見解を交えつつ、幅広いがんに関するさまざまな情報をこれほど分かりやすくコンパクトにまとめ上げていることには驚きを禁じ得ない。しかも、さらに詳しく知りたい読者にはQRコードで参照先のウェブサイトを指し示すなど、インターネットにも容易に連携し

てさらに知識を深めることができるように工夫もなされている。
がん保険への加入を検討している方にとって大変役立つ書籍であるだけでなく、募集人としてがん保障をすすめるに当たってがん治療の未来像を語れるだけの知識を身に付けることは極めて重要であり、そのため欠かせない良書といえる書籍である。私自身、あらためてがんに関する知識をバージョンアップして再整理できたのも本書のおかげだと心から感謝している。

がん保険への加入を検討中の方、そしてがん保険を勧誘する募集人の方にとって必読の書として是非おすすめしたい書籍である。
(A5判/282頁、保険毎日新聞社、2022年10月10日発行、税込3300円)